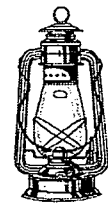


グローバル化・国際化と宗教

ローランド・ロバートソン



I

グローバル化 Globalization という用語を使う際に、私は、「単一の場」と呼ばれるものを作りだすために全世界が次第に相互依存的になるような、総体的な過程を考える。そうした「単一の場」を、特別な意味で「ワールド・ソサエティー」と呼ぶこともできるが、それは、この用語で国家として構成された諸社会の消滅を示さない限りにおいてである。

現今の諸社会の間では、多元的な総合関係の強化を生

み出す相互浸透の過程が疑いようもないほど大きくなっているが、国家の指導者たちもいまだに、さまざまな方法でその過程に順応しようとし、また、それを統制しようとしているのも事実である。国際化の概念は、まさにこうした点において重要になってくる。換言すれば、国際化は、国家として組織された諸社会が示す、グローバル化過程に対する積極的な対応と関係しているのである。積極的な対応というのは、グローバル化過程への——一つの国民社会を「ワールド・ソサエティー」により深く関与させようとするような——態度といったもの

を意味する。そうした行動の範囲は、一方の極での他の諸社会から学ぼうとする試みから、他の極でのワールド・ソサエティーを支配しようとする努力にまでわたっているだろう。実際のところ、現代の複雑な環境のなかで、所与の国家のいずれかが、この事についての明白な戦略を備え、かつそれを維持できるとするのは、ほとんどあり得ないことである。したがって、二十世紀末に起こりつつある加速度的なグローバル化過程への対応の程度と本質はどうあるべきかという問題をめぐる論争——実際には闘争——が多くの社会でみられるのは、けっして驚くべきことではないのである。

世界を見渡して、諸社会がこうしたたぐいの問題と闘っていることを意識すればするほど、われわれは、人類史の多くをそうした観点からみるようになる。とくに、現在われわれが経験しているグローバル化および国家的全社会的規模での国際化への戦略は、過去において、たとえ当時は全地球的な意味におけるワールド・ソサエティーへの直接的な見通しはなかったとしても、諸社会が同様の問題に直面したときの対処の仕方は問題であった

ことに気づかせる。さらにいえば、われわれは、様々な社会が、その社会の外的環境に選択的に関与すること、社会（あるいは帝国）の内的「強化」とを統合する（調整する）問題を、どの程度まで制度化してきたという観点から、諸社会を比較する必要性に迫られている。

今日の主要な例をあげれば、社会の再構築と開放性をめぐってソ連で起きている闘争がある。その闘争はロシアの歴史が、千年前に東ローマ帝国からキリスト正教を借用して以来、国内問題の強調と対外的問題の強調とを強く相互に競合させながら進んできた歴史であったということを、より一層明らかにしてくれる。

さらに、社会全体のアイデンティティの問題にとって、国内の「強度」と外部との関わりとの関係が、いかに重要であるかを見てとるのは、さほど難しいことではない。さらにすすんで、この二つの問題の間に比較的安定した関係をもたらすことのできる社会は、自らのアイデンティティについて疑念をほとんどもたない社会であるといえよう。というのも、アイデンティティは、けっして自明のものではないが、国内的関心事を対外的関心事と

関連させて位置づけようという文脈のなかでいつでも取り決められるからである。したがって、国内のおよび対外的関心事のバランスをとるという責務を、長い間比較的傷つかずに扱ってきた経験をもつ社会は、大体において、現今のグローバル化過程に直面するための、よりよい備えをもつのである。その主な理由の一つは、長い間外国の思想に対して抵抗し、またそれを選択的に混入させてきた社会は、グローバル化過程に伴う、自らの文化と伝統の相対化をうまく処理しうるだろうということである。もちろん、こうしたことは、ある程度「外国の」思想の用語で「自身を理解」してきた社会は、定義によれば、自らの相対化をなしてきたという事実由来するのである。アイデンティティがある程度、他の諸文化によつて創造されてきた場合には、「他の文化」による挑戦も、それほど強力には感じられないのである。

以上、極めて仮説的な表現で述べてきたが、それというのも、われわれはそんなに「完全な」現実の社会を見いだすことを期待すべきではないからである。にもかかわらず、現存する諸社会のなかで、日本はとくに興味

深い。というのも、ここ千四百年間ほどの日本の歴史は、一八六〇年代末の明治維新に先立つ長い鎖国期間にもかかわらず、そうした事柄に対するかなりの鋭敏さによって特徴づけられてきたからである。形態は外国の思想で組み立てられてきたが、その内容は固有の慣例で成り立っているその不均衡の程度において、日本は比類のない社会である (Pollock, 1986)。たとえば、他のほとんどの——たぶんすべての——発展力のある社会で類似の現象がみられるとしても、日本は、そのデイレンマの二つの角を明白に政治文化的に制度化したという点で、幾分独特である。その例証としては、「和魂漢才」というスローガンや、明治初頭に西洋を取り込むために行った西洋文明の導入があげられる。多くの解説者がここ二、三年の間に指摘してきたように、国際化の問題をめぐって、日本で現在、大きく問題になっている事柄は、こうした観点からみられるべきなのである。

II

グローバル化をめぐる最近の議論のなかで生じてきた

論争点の一つは、その過程において宗教がどの程度中心的な要素であるかということに関するものである。世界システムとよばれるものについてなされてきた研究の多くは、グローバル化過程をまったく世俗的で経済的な事柄と考えてきた (Robertson, 1985)。しかしながら、一九七〇年代末と一九八〇年代初頭に世界各地で起こった政治—宗教的運動のうねりは、宗教により多く注目するグローバル化過程の概念の展開を促進してきた。とくに、一九八〇年代末の現在みることができるよう、宗教とグローバル化の関係についての関心の増大は、二つの主要な論争点を生み出したのである。

第一に、全体としての世界というイメージを形成するうえで宗教教義が果たす重要な役割について、われわれはますます意識するようになってきた。換言すれば、各々の主要な世界宗教は世界のイメージをもたず媒体であり、そのイメージは、しばしば他の宗教との遭遇において鍛えられ、修正されてきた。したがって、たとえば、ここ数世紀の間に主として世俗的過程によってワールド・ソサエティーが生み出され、世界が縮小されてきたこと

が事実だとしても、そのことが、宗教がその過程に意味を与えるうえで重要な役割を果たしてこなかったということの意味するわけではないのである。

さらに、ワールド・ソサエティーへ向かう動きのなかで、ひとたびある段階が達成されると——われわれはいまその段階にあると思うのだが——、そこにはワールド・ソサエティーそれ自体のアイデンティティの問題が生じてくる。著書のなかで私は、それをグローバル・ティ・Globalityの問題と呼んできたが、そうすることによって現代生活における人類の増大する特徴に注意をひきつけてきた。

グローバル・ティは、いつそう身近な現代の問題を、帳消しにするわけではないにもかかわらず、それを相対化してしまふ、危険で脅威的な状況であるといえよう。それは、「地球という惑星」のうえにある人類のまさに本質と未来への関心を主題化し、そうすることによって、そうした事柄について語るものをもつ、あらゆる現存の大宗教と形而上学的世界観を集め、論議するのである。同時に、ますます増大する「全体としての世界」という

意識は、必然的に、旧来の宗教的テーマに革新的な変化を生じさせる。その極端なものの一つは、明らかにグローバルティを非常に危険で脅威的であるとみなし、(アメリカ合衆国のいくつかのキリスト教根本主義的集団の場合のように)グローバル化過程それ自体に反対する。他方の極には、世界全体を、いわゆるグローバル化過程の栄光に取り込もうとする試みがある。後者のカテゴリーに入るものとしては、東アジアで生じた多くの運動があり、グローバルな影響力に関する限りもつとも顕著なのは、創価学会と統一教会である。

また、より一般的で、ある意味でより古い宗教運動が、グローバル化過程によって新たな生命を与えられることも指摘されるべきである。それについては、とくにカトリック教会とイスラム教があげられる。カトリック教会は、西洋における資本主義の勃興^{はつう}とともに開始された世俗的、経済的發展への着手という点において、グローバルであることとほど遠いわけではない。また、イスラム教は、近年、西洋的および東洋的生活形態に対する主要なもう一つの文化として立ち現れてきた。

くものであることに、疑いの余地はない。

実際のところ、世界各地で近年にみられる教会と国家の間の緊張、および宗教的支配と政治的支配の間の緊張の多くは、まさにこの問題にかかっている。グローバル化は、宗教的支配と政治的支配をめぐるどんな解釈についても中心をなしている。というのも、全体社会の伝統とアイデンティティの相対化の過程は、日本語で「国体」とかつて呼ばれたようなものを国民社会が主張するよう強制するからである。しかしながら、ここには何らかの矛盾が存在する。すでに述べたように、近代国家の主要な形成原理の一つは、国家的事項からの宗教の分離であった。

すなわちそれは、ある社会が国際社会の正当なメンバーとなるために必要なものとして期待され、一様ではないとしても、ほとんど世界的に広がった原理であった。しかし、そうした期待は、国民社会が国民的独自性の意識を表現しようとする自然な感情を抑圧し、団結とアイデンティティの消滅を強制するものである。必ずというわけではないが、その独自性の意識の表現が宗教的、あ

第二に、宗教は国民全体のアイデンティティおよびナショナリズムとの関係によって、かなりグローバル化の過程に巻き込まれている。こうした現象が明らかに十八世紀末の西洋における国民国家の形成と結びついて明らかになったことから、しばしばその世俗的な性格が強調されてきたが、他方、そうした発展はある程度十六世紀のヨーロッパで生じた政治宗教的闘争の線にそってなされたという事実も残っている。十八世紀末において、フランス、イギリス、新たに建国されたアメリカ合衆国およびその他の地域で起こった、社会組織の形成と国境の維持を支配する原理としての国民国家の興隆が、市民となることと宗教的告白とを切り離したとしても———そうすることにおいて、国家への関与を宗教的関与より公的に優越するものとしたのだが———、宗教が国家形成において重要な役割を果たしたことは否定しえないのである。さらに、国家の宣揚が世俗化を作り上げたという議論が多くなされるとしても、国家がますます国民全体のアイデンティティと集合的意味をめぐる議論の焦点となってきたという意味において、そうした見解は誤解を招

るいは少なくとも疑似宗教的性格をもつだろうことは、いうまでもない。このゆえに、最近の社会学では市民宗教現象への関心もたれている。

III

あまり明白ではないけれども、以上のことが、私がつくに重要であると指摘した、宗教とグローバル化についての二つの主要な関心事の結合である。とくに、私は、全体社会の国際化の過程における宗教の役割に注目している。グローバル化と国際化を区別したことを思い起こしてほしい。すなわち、私は、グローバル化という用語を、ワールド・ソサエティーといったものを生み出すための世界の縮小をあらわすために用い、国際化という用語を、国民社会(あるいは、原則としてなんらかの「地方的」な集合体)がグローバル化過程に順応する過程を示すために用いてきた。ここで私は、宗教的集合体が大いに(グローバル化に加えて)国際化に対応することを余儀なくされるだろうことを示すだけでなく、ある状況のもとでは、宗教的集合体は国際化の過程において重要な役割を果た

すということも指摘したい。

このことは、日本の事例にあらわれている。この点をめぐる日本の経験は、明らかに、五、六世紀に仏教および中国の宗教的、形而上学的思想と実践が浸透したときにさかのぼる。さらに適切に言えば、日本固有の宗教的伝統を元来は中国のものである用語——すなわち、神と道——をもって名づけ、区別しようとした試みが、途方もなく重要な帰結をもたらしたのである。キタガワは次のように指摘している。

「神道という名称を採用したことは、日本列島の上での特殊歴史的な経験によってのみ妥当とされる、生と世界の意味についての日本固有の理解と、普遍的な法や原理——儒教の道と仏教のダルマ——に基づいた儒教と仏教の主張の間の深い緊張を増大させただけであつた。」(Kitagawa, 1987: 524)

本稿は、もちろん、日本化された信念と実践、仏教と儒教の普遍的主張、および日本固有の宗教の間の関係についての、周知の諸説を繰り返すところではない。私はただ、これらの関係が数世紀にわたって修正され、再生

くに強調してきた。事実、ハーダカは、「新宗教の世界観は日本の民族性と不可分である」と主張している(Hardacre, 1986: 32)。多くの新宗教運動は、日本のもつグローバルな重要性に、ほとんど注意を払ってこなかったが、より卓越したもののいくつかは注意を払ってきた。そのなかには、創価学会と立正佼成会がある。両者は、互いに異なった、しばしば対照的な方法で、グローバルな秩序といったものを打ち立てるうえで日本が果たす役割について特別な関心を示している。両者は、調和的世界の形成に対する日本の特殊な役割を主張するという点で、特殊主義的であると同時に普遍主義的である。したがって、新宗教のうちでも、少なくともより卓越したものはいくつかは、いろいろと取り沙汰されるにもかかわらず、日本自身とより広い世界の間の関係に深い意味を見いだそうとする日本の長い伝統を継承していると結論づけることができる。換言すれば、国際化とグローバル化は、現代世界では、控え目にいえば、例外的な日本の事例において、とくに深い意味をもつのである。

されるうちに、実際、日本文化のかなり重要な部分を占め続けている特殊主義的普遍主義的な文化の基盤をたしかに構成してきたことを強調したいだけである。自らのアイデンティティの多くを「外国の」用語で表現してきただけでなく、同時に、しばしば普遍主義的な信念や価値の特殊な組合せの「真の宝庫」であると主張してきた社会は、たしかに、グローバル化過程および国際化の問題に代表されるような挑戦に対して、非常に鋭敏である。したがって、今日の他の諸社会にみられる国際化への関心の広がりとは過小評価されるべきではないけれども、他のどの国よりも国際化に対してはるかに多くの明らかに関心をもっているのが日本であることを知っても、けっして驚くべきではないのである。いずれにせよ、グローバル化と国際化に対するこうした鋭敏さの基盤は、大いに、宗教的および形而上学的用語と関連しつつ形成されたのである。

ときには日本の第二の近代化の開幕とよばれる、一九四五年の連合軍の占領の当初から、もちろん、新宗教運動の激増がみられ、それらの多くは日本というものをと

註

(1) ハンでは、私は、日本宗教のマクロな局面を扱っている。ミクロな局面については、「グローバリゼーションと社会の近代化」(Robertson, 1987)で論じた。

引用文献

- HARDACRE, Helen, *Kurozumikyo and the New Religions of Japan*, Princeton, Princeton Univ. Press, 1978.
- KITAGAWA, Joseph M., *Japanese Religion: An Overview*, in: Mircea Eliade et al. (eds.), *Encyclopedia of Religion*, Vol. 7, New York, Macmillan, 1986, pp.520-38.
- POLLOCK, David, *The Fracture of Meaning: Japan's Synthesis of China from the Eighth through the Eighteenth Centuries*, Princeton, Princeton Univ. Press, 1986.
- ROBERTSON, Roland, *The Sacred and the World System*, in: Phillip Hammond (ed.), *The Sacred in a Secular Age*, Berkeley, Univ. of California Press, 1985, pp.347-358.
- ROBERTSON, Roland, *Globalization and Societal Modernization: A Note on Japan and Japanese Religion*, in: *Sociological Analysis* 47 (S) 1987, pp.35-42.

(ピッツバーグ大学教授)

訳・中野 毅 (なかの つよし・創価大学助教授)